

「偶有性の時代の国家観・人間観」

茂木健一郎

PHP 研究所 VOICE 2008年2月号 p.142~p.151

(『「日本論」の危うさ』として所収)

自身をメタ認知する

インターネットに牽引されたグローバリズムの時代、誰もが「自分自身のアイデンティティ」を模索せざるを得ない状況になってきた。

若者たちの間では、「キャラがかぶるのはまずい」というような言い方がされる。仲間内で、同じようなキャラクターを持った人が複数いることを避けようとするのである。

生物は、これから自分たちが投げ込まれる状況を察知するものである。若者たちが感じている時代の空気は、そのまま、資本主義が高度化した「デジタル資本主義」の趨勢でもある。ネットワーク社会では、あるユニークな特性はあつという間に伝搬する。グラフ理論で言う「単連結」(一つながりの状態)の関係性で結ばれた現代の地球社会においては、ある特定の「個性」は、極端なことを言えば一つだけあれば事足りる。

情報化した社会においては、あるポジションを占める「ソフトウェア」は有力なものが幾つか(多くの場合一つ)あれば良いのである。マイクロソフトの製品が圧倒的なシェアを占めるコンピュータのオペレーティング・システムや、グーグルやヤフーが寡占するインターネットの検索エンジンのことを考えれば納得がいくだろう。

誰もが、自分自身のマーケットの中での位置付けは何なのか、「売り」に出来ることはどのような点にあるのかということ問い直す必要に迫られている。脳の仕組みに即して言えば、自身のユニークさを掘り下げるためには、何よりも自分というものを客観的に

見る「メタ認知」のプロセスが大切になる。世の中にある数多の「視線」のうち、「自分」を「自分」として見ているのはまさに「自分」一人だけである。その視点が自分にとってどれほど大切なものでも、世界全体から見れば芥子粒のような重みしかない。マーケットにおける評価は、他者からの目によって決まる。自身を見つめる視線を客観化しなければならない所以である。

メタ認知は、脳の前頭葉の働きによって支えられている。前頭葉は脳の他の部位の活動を統合し、制御する役割を果たしている。いわば、脳全体の「司令塔」である。前頭葉が脳のさまざまな領域をモニターするプロセスによって、メタ認知という人間において特に発達した能力は生み出されるのである。

グローバル化した世界の中では、様々な境界を越えて人々が行き交う。一つの文脈からとらえた価値観だけでは、「持続可能な生」は支えることができない。個人も国家も、地球規模に広がったネットワークにおける自分の位置付けを明瞭にしなければならない時代になった。常に、「他者の目」を通して自分自身をメタ認知し、評価し続ける。そのような姿勢なしに、世界に通じる卓越した価値を示すことはできないのが現代なのである。

このような競争原理は、単にネット・ビジネスの領域においてのみ成立しているのではない。社会の「保守本流」と呼ばれる領域においても、他者の目を通して自己像をみがくことが必須になってきた。例えば、従来その地位が不動のものと思われていた東京大学でも、小宮山宏総長の下改革の試みが行われている。自民党や民主党といった政党においても、人々の間での自らのイメージをどのように作り込んでいくかが大切なテーマとなりつつある。保守本流の一見揺るぎがたく見える存在こそ、自身のイメージをメタ認知し、その由来するところを問い直す必要に迫られている。

大文字ではなく、偶有性を通して

ここで重要なのは、自分が何者であるかという「個性」を、固定化して考えないことである。他者との関係性の中で柔軟に変化する

存在として、自分の「個性」を考えておくことが大切である。つまりは、広い意味での「生命原理」に寄り添わなければいけない。そのような「命」を見失う時、人も組織も衰退に向かってしまうのである。

今日において、個人にとっても、国家のレベルでも、「自身」について考える際にどうしても避けなければならない「罨」は、自分自身の立場がこの世界の中で特別なものだと思いこんでしまうことであろう。

村社会においては、絶対にして動かし難い秩序のようなものがある。そのような状況の中では、共同体の構成員によって価値があると見なされるものを「大文字」で書いて絶対視することは許されるし、生きることに資する。

しかし、グローバル化した世界においては、無防備に「村社会」の論理をさらけ出してしまうことは、単に笑いものになるだけのことである。とりわけ、日本語圏における言説は、発信する側にどうしても「どうせ読むのは日本語を母国語とする人がほとんどだ」という「身内の論理」が無意識のうちに働きがちである。それが、いかなるモラルハザードに私たちを誘いやすいか、昨今の言論状況を見ていれば心ある者にとっては明白であろう。

「私」という主観性も、「日本」という国家も、ともすれば「大文字」で記される不動の存在だと思いこみがちである。しかし、実際には、個人も国家も、ネットワークの中に存在する様々な他者とのかわりの文脈において存在している。大文字で書かれた固定された人間観、国家間を持っていては、生命の本質である生き生きとした他者との行き交いが失われてしまう。

とりわけ、国のあり方については、もっともらしい言説は、警戒すべきである。一般の人々においてもそうであるが、為政者はましてそうである。国家というもののあり方について、それを固定化した「大文字」の概念の下で考察することは往々にして議論の質を低める。国のためを思っているようでいて、かえって最良の引き倒しになってしまうのである。

「国」や「個人」といったもののアイデンティティを生き生きと

したものに保つために何よりも必要なのは、自ら進んで「偶有性」の中に身を置くことである。ここに、偶有性とは、予想できる規則的なことと、予想できない不確実なことが入り交じった状態を指す。

生きる上で、偶有性を避けることはできない。他者と出会った瞬間に、偶有的なプロセスが始まる。人生における成熟度は、偶有性に対する態度によって決まる。偶有性が避けられないということを見直せない者は、どれほど確固たる基盤に身をおいているように見えても、ついには衰退に向かう。「大文字」の上にあぐらをかき人間は長い目で見れば下降線をたどらざるを得ない。

日本に生を受け育った人が、日本という国を愛するに至るのは自然な成り行きである。しかし、日本という概念を、「大文字」として前提として、その上に安住する者は、かえって国を弱体化させる。そもそも、国という存在は、起源において危うさをはらんでいるものである。「どうなるかわからない」という偶有性から離れる時に、生命力は失われる。生命は、偶有性と密接に寄り添って発達するものなのである。

改革ということを、容易には信じないという態度は良い。保守派をもって任ずるのは、時に尊い生き方である。しかし、保守派は、改革ということの中に潜む誤謬を指摘することに熱心だけでなく、自分自身の内なる危うさにも自覚的でなければいけない。そうでなければ、自分たちのみならず、保守の立場から支えているはずの国自体のあり方をも隘路へと導くのである。

国境における偶有性

為政者は、常に生命原理に寄り添わなければならない。そうでなければ、生き活きとしたかたちで国を運営することはできない。

一見、安定して存在しているかに見えるものの背後にいかにも、不安定で危うく、偶有性に満ちた起源があるか。そのことに自覚的であるのが、真の保守主義者である。保守主義者は、偶有性に寄り添う意志と覚悟を持たなければならないのだ。

国家にとって、国境はもっとも重要な属性の一つである。それは、

国家というものの存在の大前提、命脈である。従って、その画定と保持に最も大きなエネルギーを費やすのは、国家としていわば当然の態度である。

同時に、もともと何の境界もない地球上に人為的な線を引くのだから、国境というものが究極的には無根拠であるということにも自覚的でなければならない。そのような意識があって初めて、国家というもののリアリティに接近することができる。

周知の通り、日本とロシアの間には、択捉、国後、色丹、歯舞の北方四島の帰属を巡る外交上の懸案がある。現在日本が実効支配している尖閣諸島については、中華人民共和国、中華民国がそれぞれ領有権を主張している。一方、竹島については、現在韓国の警備隊が常駐しているが、日本側は日本の固有の領土だとして、鳥取県は2005年に「竹島の日」を制定した。

北方領土、尖閣諸島、竹島は、日本国内だけでなく、ロシアや中国、韓国それぞれの国内でナショナリズムの感情をかき立てる種となっている。とりわけ、日本、中国、韓国の間には歴史的な経緯を背景とした複雑な感情があり、史実に基づく冷静な議論がなかなかできないのが事実である。

北緯20度25分東経136度4分に位置する沖ノ鳥島は、日本最南端の島である。しかし、中華人民共和国によって「海洋法に関する国際連合条約」における「岩」であり、約40万平方キロメートルの排他的経済水域も存在しないと主張されるなど、国際的論争の対象となっている。

このような日本の国境を巡るやりとりにおいてナショナリズムの心情がかき立てられるのも、人間として自然な心の働きと言えないこともない。一方で、国境紛争というものが、そもそも国家という人為的制度に不可避免的に伴ういわば「税金」のようなものであるということも正しくそしてリアルに認識する必要がある。

実際、地球上の任意の国家の組み合わせをとってくれば、そこには必ずと言ってよいほど国境を巡る争いがある。国境紛争とは例外ではなくむしろ常態なのである。中国とインド、中国とロシア、中国と台湾、中国と朝鮮半島。近隣諸国を見ただけでも、領有権や領

土の歴史的経緯を巡る紛争や議論は絶えることがない。

このような世界のあり方を曇りのない目で見れば、「国境紛争」というものが関係者の悪意の結果ではなく、国家という制度自体に内在する脆弱性に由来することは明らかである。つまりは、偶有性の産物である。そのような認識をもって事に当たらなければ、国際政治のリアリティに接近することはできない。

誰もが、自分の事情は特別だと思いがちである。しかし、他人にしてはそんなことは知ったことではない。為政者が自国の利益を図るのは当然のことである。しかし、とらわれてしまえば、リアリティから離れる。他者との接触の中で、自分を磨き上げる機会を失ってしまう。

国際政治の複雑なマトリクスの中で、どのような戦略をとるか。国家というものに必然的に付随する偶有性を認識し、引き受けることをしなければ、生き活きとした外交政策など持ちうるはずがないのである。

起源問題

「日本」という概念を、凝り固まってしまった「大文字」のものとして考えてはいけない。他者と行き交い、異文化と接し、自己を磨き上げる。そのような機会を逸失してしまえば、国の文化は危うくなる。

「日本の文化の伝統を守る」といっても、その肝心の対象を固定化されたものとして認識しては、単なる遺物を墨守することになってしまう。生き活きとした偶有性の中に身を投じてこそ、文化の命脈は保たれるのである。

尊敬すべき、今となつては一見動かし難く見える文化も、その起源においては目眩がするような不確実の気配に満ち溢れている。むしろ、起源において危ういくらいのものでなければ、時代を画するような新たな価値は生み出すことができないのである。

千利休が創始した「茶」の文化は、今となつては尊敬すべき、動かし難い価値として認識されているかもしれない。しかし、その起

源は、一体どうなってしまうかわからない偶有性の中にこそあった。

千利休が向き合ったのは、当時の「絶対権力者」豊臣秀吉だった。応仁の乱から百年以上続いた戦乱の世を「勝ち上がった」チャンピオンである秀吉が、当時、どれほどの光輝と恐ろしさを帯びていたか、私たちには容易に想像することはできない。今日の日本において、首相は様々な権力を一身に集め、まさに国内でもっとも力のある人であるが、その首相でさえ、当時の秀吉の絶対権力の前では色を失うであろう。

何しろ、戦国時代においては、親兄弟の間でさえ「裏切り」が常態化していたのである。それは、「偶有性」がむき出しのまま荒れ狂う時代であった。「何でもあり」の闘いを制して、秀吉は関白の地位につく。その指を動かすだけで、首が飛ぶ。そのような権力を持った秀吉に対して、千利休は「命がけ」の「テロ攻撃」を仕掛けたのである。

当時、茶道で使われていた道具は、中国由来の豪華絢爛たるものだった。それに対して、利休は、自ら切り出した竹を花活けに使ったり、南の島から伝来した何の変哲もない水瓶の蓋を灰入れに使ったりと、従来の価値観を根底からくつがえすような新たな試みを多数行った。

利休と秀吉の出会いは、運命的なものだったと言わざるを得ない。貧しい生まれから身を起し、ついに関白にまで上り詰めた。その道筋で、主君として仕えた織田信長の死にも直面した。波瀾万丈の末たどり着いた最高権力者の地位。贅を尽くした「聚楽第」を築き、「黄金の茶室」も作らせた。そんな人生を送ってきた秀吉が、思いのままに豪華絢爛たる世界を追求できると思った矢先に、千利休に出会った。

利休の美意識は、秀吉の価値観を根底からくつがえすようなものだったに違いない。それでいて、利休が指し示す世界は、秀吉が苦勞の末に築き上げたものを全て投げ打っても良いくらい、魅力的なものだった。秀吉は自らの人生をふり返り、複雑な思いがあったことだろう。

茶室の設いは、「にじり口」から身をかがめて入る。どんなに権

勢を誇る者でも、刀は外に置いて「裸」になって入らなければならない。狭い空間の中で亭主と向き合う。そこでは、世俗の関係性や価値観はそぎ落とされる。秀吉にとって、向かい合った利休はどれほど輝き、そして近づき難く見えたことか。

自分は朝廷から勅許を受けた関白であるはずなのに、目の前の、堺の商家出身の茶人に頭が上がらない。秀吉はどんなに口惜しかったことだろう。そして、心底恐ろしかったことだろう。

1591年、秀吉は70歳の利休に切腹を命ずる。限りない心酔と尊敬の対象であった大茶人に「死」を賜る。秀吉の心中を推察するに、そこには単なる茶の道というに留まらない、生きるということの意味を賭けた大葛藤があった。

世界の文化史をふり返っても、秀吉ほどの絶対権力者に利休が仕掛けた根源的な意味での「テロリズム」は他に類を見ない。しかも、利休の転覆は「ためにするもの」ではなく、真摯なる美意識に基づいた行為であった。それが真正なる価値に溢れていたことは、利休の死後400年を経てもなお、お茶を巡る数々の文化が日本の大切な「宝石」として受け継がれていることから証左される。

ふり返って、今日の芸術家、文化人はどうだろう？ 権力とは無関係に、「けもの道」を行く者がいる。特段の政治的見解を持たない者がいる。権力にすり寄る者もいる。国家に寄り添って權威の階段を上っていく者がいる。しかし、利休ほど過激で、根源的なかたちで最高権力者と向き合う者は皆無である。そもそも、秀吉のような絶対権力者自体が、ここ日本では絶えて久しい。

今では、茶道は家元制度の神秘のベールに守られながらも、「お習いごと」としてすっかり人口に膾炙し、街のカルチャーセンターで教えられ、教養の一部となり、心ある人たちによって嗜まれている。しかし、その起源が、命をやりとりをするような、まさに烈しい偶有性の真っ直中の中にあつたことを私たちは忘れてはならないだろう。利休がいかに厳しい偶有性の中でその道を見いだしたかということをしちんとふり返ってこそ、私たちはその芸術の真価を享受することができる。偉大な故人に相応しい尊敬の念を捧げることができる。

茶の湯は、とりわけ外国から見た時に、現在の日本文化の「時価総額」のうちかなりの部分を占めている。今となっては動かし難い、疑問を差し挟む余地がない立派なものに見えるが、しかし、その起源が本来偶有性を孕んだものであることを、私たちは決して忘れてはならないのである。日本に関わること全般も同じことである。

国家レベルの偶有性が露わになる時

秀吉と利休の例に表れるように、私たちの生の偶有性は本来激しさを内包しているものである。とりわけ、偶有性が国家のレベルで現れる時に、それは多くの人々の運命を左右する激動の歴史となって結実する。

人類の戦乱の歴史はまさに「偶有性の暴走」そのものである。勝つか負けるか。占領するか、されるか。人間の歴史をふり返れば、そこには、遺憾ながら数々の殺戮と支配・被支配の争いがあった。

日本が先の大戦で敗れ、GHQが進駐してきた時に、白洲次郎は宰相吉田茂の下で折衝に当たる。白洲次郎は英国留学が長い。英語がうまいとほめたアメリカ人に「あなたも勉強すれば私くらい上手くなるよ」と言い返した。それくらい負けん気が強かった。

日本国憲法を起草中、その白洲次郎に向かって庭にいたホイットニー准将は「今、あなたの国の原子力の太陽 (atomic sunshine) を楽しんでいたところですよ」と言い放ったという。つまりは恫喝したのである。

一つの国の制度が揺らぎ、将来が不確実性の霧の中に包まれる時、そこにはまばゆいばかりの偶有性の刃が現れる。そんな折に、つべこべ言っても仕方がない。ただ一所懸命に生きてみるしかないことである。日本国憲法の起草に携わった当時の日本人は、必死になって踏ん張ったことだろう。その結果を、とやかく言っても仕方がない。今日の私たちは、今日置かれている文脈の中で、やはり精一杯頑張ってみるしかないことである。

もともと、自然界のありさまを曇りのない目で見つめれば、そこは利己主義的な「生存のための闘争」の現場である。もちろん、母

が子を育てたり、仲間たちのために犠牲になったり、共生したりといった調和への気配は見られる。しかし、生物界の基本は生存競争であり、そこには仁義も何もあったものではない。道徳など、生きる糧にならなければあつという間にうち捨てられてしまう。

小林秀雄は、文学というものは本来戦争などとは関係のないもので、平和でなければ携わることができない、しかし、いったん戦争になってしまえば、もう仕方がない、そこには勝つか負けるしかなく、自分も闘うしかない、というような意味の言葉を残している。「もののあはれ」を愛する心優しい文学者でも、この世の真実はわかっている。平家物語に描かれた栄枯盛衰の姿は、今日の私たちにそもそも何を伝えるか。

どんなに美しい理想を描いても、それがこの世の中のリアリティに向き合ったものでなければ、絵に描いた餅になってしまう。子どもがダダをこねておもちゃを欲しがるとなるとなってしまう。

もちろん、偶有性の無秩序な爆発は愚かである。応仁の乱に続く戦国の世、日本人は武力に任せて自らの野望を遂げようとする男たちの闘いに、ほとんど嫌気が差したのではないか。織田信長のイメージは英雄だが、当時の人たちにとっては、迷惑な存在でもあったことだろう。とりわけ、焼き討ちにあった比叡山の関係者にとっては、許されべからざる輩だったことだろう。

続く徳川の太平の世が、今日に至る日本人の基本的な性格を作り上げた。日本人に個性がないなど、とんでもない。事実在即して言えば、日本人は素材としては一人ひとりきわめて個性的である。ただ、少しでも尖ると「平均値」へ引きずり降ろそうとする「ピア・プレッシャー」が強すぎるだけである。KY（空気を読め）などと言うが、周囲の空気を読むくらいは別に日本人でなくてもできる。肝心なのはその後、他人に合わせることを優先させるか、それとも自分の個性を発揮することを心がけるかの違いである。

戦乱の世にあまりにも強烈な個性が輩出して、日本人はすっかり懲りてしまったのだろう。その後、私たちは、とりわけ国家そのものの偶有性にかかわるような領域においては、指導者の個性をきわめて微温的にしか発揮しない文化を選択してきている。明治維新の

折、戦国時代のような荒々しい偶有性が再び一時的に現れたが、それも近代化の中で次第に国家的制度の中に取り込まれていった。

偶有性を呼び覚ます

偶有性は、生きる上でどうしても欠かせないものであるが、その一方で、もし不用意に暴走させれば深刻な災厄をもたらす原因ともなる。

少しずつ下降しているとは言え、依然として圧倒的なアメリカの力。その中での日米同盟。中国やインドの台頭。地球温暖化対策。

日本を取り囲む国際情勢をリアルに眺めれば、私たちの国が、戦国時代や第二次大戦に至る道のようなかたちで再び烈しい偶有性の嵐の中に巻き込まれることはおそらくないであろう。また、敢えてそのような道を志向することは愚かである。

生きる上での偶有性の総量は、元来それほど変わらない。私たちは、人類全体に災厄を及ぼしかねない偶有性の回路は封印し、文明化された市場経済の中でグローバルな競争を行う世界の中で、一人ひとりの生の偶有性を輝かせる道を選択すべきなのだろう。

インターネットの発達は、私たちの社会に見られる偶有性を質量ともに豊かなものにしてきた。様々なネット・ベンチャーの隆盛は、従来の考え方に縛られない活躍する若者たちを台頭させている。

組織と個人の関係は、以前ほど堅いものではなくなった。今や、インターネット上のブログが「名刺代わり」になる時代。就職面接の十五分間をごまかせるかもしれないが、数ヶ月、何年にもわたって記録してきたブログはごまかせない。そこに、その人の個性が表れる。

国境という、国家という制度に内在する偶有性よりも、インターネット上の偶有性の方が多くの生活者にとってよほどリアルで、しかも経済的にも大きな意味を持つ主戦場となりつつある。従来型の古い国家観とは離れた場所で、「もう一つの地球」の上での覇権争いが本格化している。そこでは、血が流されることこそないものの、現代の「織田信長」や「豊臣秀吉」が検索エンジン、オークション

サイト、書籍販売の世界における「天下統一」を目指して争っている。一方で、そのような「ネットの論理」自体を相対化するような「千利休」の天才は未だ現れていない。

インターネットは時代の寵児だが、そこで生まれている現実新しいものであると同時に、人類が常にその中に投げ込まれてきた「偶有性」のダイナミクスの延長線上にある事象群でもある。

私たちが躓くのは、常に「起源問題」においてである。政治権力の正当性の起源は、ベールに包まれているのが本来である。なぜならば、そこには、必ず「どう転ぶかわからない」という偶有性の霧が立ちこめているからである。

起源にまつわる偶有性に目を閉じ、すでにできあがってしまった偶像をただ横にしたり縦にしたりするだけの時、私たちの生から生き活きとした気配は消え、ただ紋切り型の、ためにするつまらない議論だけが残る。昨今の「日本の伝統」や「国家のあり方」を巡る多くの議論は、そんな陳腐に墮してはいないか。

「日本」「自民党」「伝統」「日本語」「日本国憲法」「日本人」「大学」「貨幣」「自衛隊」。

「様々なる意匠」の起源に立ち返り、それらが生み落とされた歴史的経緯に向き合い、そこに立ち現れる偶有性の気配の中に身を浸す。とかく硬直化しがちな日本という国を巡る議論に生命を吹き込む道は、それ以外にない。

日本の伝統を巡る議論が、インターネット上のベンチャーにかかわる熱い論調とは関係がない、むしろ逆のベクトルを向いている文脈に置かれているうちは本物ではない。国家を巡る議論が本来の「偶有性」を取り戻す時、そこに立ち現れる気配は「ウェブ2.0」を巡る今日の論調と同質のものになるはずである。

もちろん、過去の失敗からは学ばなければならない。「歴史を無視する者は、同じ失敗を繰り返す運命にある。」偶有性は、へたに解放すればパンドラの箱になる。

大切なのは、今日人類にとって価値あることを見きわめる「プリンシプル」と、そのような原則を貫きつつこの世の生という「偶有性の海」を泳いでいく「覚悟」であろう。